

## マイ コーナー

246

### 栗田焼

左京区 田中誠孝



安田信人氏 HP より

南禅寺から山科方面に下ると三条通と交差する蹴上に至る。ここにある都ホテルの西30メートルほどのところに栗田神社の参道がある。この入口に「栗田焼発祥之地」と刻まれた石碑が建っている。この付近は栗田口と呼ばれ、京への七口の一つであった。七口とは鞍馬口、大原口、荒神口、栗田口（三条口）、伏見口（五条口）、竹田口、東寺口（鳥羽口）等の京都に入る七つの関所であったとされているが諸説あり他にも関所の存在を挙げている文書・史料も存在し、なぞらえる七という数字のようである。

この地は山城国愛宕郡栗田郷と言われ、上栗田郷（北白川・浄土寺・鹿ヶ谷・岡崎・阿波多）と下栗田郷（蹴上から

南の七条辺りまで）に別れていて、栗田氏（あわたし）が栗や瓜を主食として生活をおくっていた里であったという。

栗田口には古くから（鎌倉時代）刀の名工（三条小鍛冶宗近、栗田口眞四郎吉光等）がいたようであるが江戸時代の元和年間（1615〜1624）に尾張（瀬戸）からの陶工、三文字屋九右衛門が三条蹴上今道町において大日山（蹴上東側）の土で栗田口焼を始めたといわれている。

栗田口焼は窯元が東山山麓一帯に広がり青蓮院御門跡の御用窯として栄え寛政11年（1799）には八基の窯と21軒の業者を数えた。窯場が栗田一帯に拡大されたため栗田焼といわれるようになった。かのよく知られた仁清（野々村清衛門）もここでロクロの修行をし、教えもしている。また栗田の青蓮院門跡の御用焼物師として青木木米の名も挙がっている。青蓮院の車寄せの所に「療病院跡」と記された石碑があるといわれているが現在は行っても見当たらない。「療病院跡」とは明治5年11月から明治13年7月までここで府立医科専門学校（京都府立医大）が外人教師を招き療病院を開設され治療と教育が行われていたらしい。近所の人はそのことをよく知っている。

栗田焼では当初は陶土を建仁寺や東岩蔵山（大日山・蹴上東側）一帯で得ていた。これが不足しはじめ、18世紀の後半には元真如堂、泉涌寺、日岡のほか洛東岡崎村で土を買取るようになる。文政6年（1823）には、五条坂側（清水焼）が岡崎土の買占めをおこなったことから、栗田焼側との間で争いがおきている。このように紛争が起きるといことは窯に従事する職人の生活区域や子弟関係がちがっているこ

とが分かる。このことから推察すると製品の優劣を競うことにおいても対峙していた可能性があり、当時の状況が推察できてなかなか面白い。

初期は銹絵・染付陶器を生産したが、唐物の写しや五器（呉器）、伊羅保などの高麗茶碗を盛んに模していたと言われている。明治初期に海外貿易が始まると薩摩焼の彩画法を取り入れた栗田焼が考案され、薩摩のものを本薩摩と呼んだのに対し京薩摩と呼ばれ、欧米で高い評価を受けたという。このように窯は栗田口、音羽八坂、清水、清閑寺と東山山麓一帯に存在し、さらには岩倉あたり一帯にも瓦窯があり、初代乾山（尾形権平・深省）は鳴滝に窯を築き、養子尾形猪八（いはち）による二代目乾山としての聖護院窯が京大病院東南にあつたことが発掘で判明している。

幼名尾形権平は野々村仁清に陶芸を学び、都の西北、乾（いぬい）の方角に窯を持った、そのときの窯名が乾山窯ということで尾形乾山とした。野々村仁清は丹波国桑田郡野々村（京都府南丹市美山町、旧大野村）の生まれで丹波焼の陶工であつたが仁和寺の門前で窯を出し仁和寺から賜った仁と清衛門の清から仁清とした。京焼は「仁清乾山写し」とばかり思っていたが栗田焼の影響もはかりしれないものがあるようだ。瀬戸の技法が始まった栗田焼が薩摩焼色絵の作風を取り入れ隆盛を極めるが世界恐慌や二度の大戦によつて桶部彌式を最後に衰退し、一度は途絶えるが安田浩人氏（元栗田焼窯元鍵屋の末裔）が再興しつつある。栗田釉は薄い肌色（卵色）で細かい貫入が多数あり年数を重ねると薄い茶色（濃い肌色）に変化する。野村美術館蔵の「栗田焼四方茶碗」は口縁が四角くしつとりとした肌色で繊細な色絵の茶碗である。